
夢小説総合・黒猫（略）

陸一 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢小説総合・黒猫（略）

【Nコード】

N0244H

【作者名】

陸一潤

【あらすじ】

ブログできまぐれに書かれた夢小説のまとめ置き場です。《黒猫街道日向日和》メイン。Dグレ男主人公。1目が死んでる。2性格悪い。3適当。4たまにデレる。《バジリスクの憂鬱》復活女主人公。骸様お相手。《マリヤの日記》NGライフ元女の子男主人公お姉ちゃん（元お兄ちゃん）の恋と娯楽のために奮闘。原作主人公限定解除の腹黒策師。

黒猫街道日向日和あるかもしれないIf教団壊滅事件（前書き）

- ・一応黒猫街道日向日和ってこんな話。
- ・主人公は男の子。みんなの弟ジジ君。
- ・元ストリートチルドレンだったところをスカウト。栄養がイマイチ足りていないので12歳に見える15歳。
- ・長い猫っ毛な前髪と眼の下のクマで忘れがれがちだが、なかなかの美少年。
- ・ストリートチルドレン時代は犯罪で稼いでいた模様。詐欺師でし
た。
- ・イノセンスはシンクロ率94%、全身を粒子化する【純白ノ欠片
（ブランクブラッド）】
- ・スカウト前、教団では、うすら笑いと共に消えるので『チエシャ
ー猫』と呼ばれていたりした。
- ・表情のボキャブラリーが、うすら笑いか無表情。激ゴーイングマ
イウェイ。
- ・裏なく正面から向けられる愛情に弱い模様。コムイさん苦手。
- ・中身はしっかり15歳。リナ嬢かわいーなーミランダさんスタイ
ルいいなーとつねづね思ってる。

←どぞぞぞぞぞ・・・

黒猫街道日向日和あるかもしれないIf教団壊滅事件

まだ昼だというのに、空は厚い雲でおおわれ黒く塗りつぶされていた。紫電が空を駆け、空間を一瞬だけ本来の姿に戻し、飛礫の様な水の塊が外壁を抉るように叩き付ける。

午後二時の鐘が鳴った黒の教団本部では、新たなホームへの移転作業へ追われていた。

「・・・これは何が起こったの？」

ジジは目の前の状況を見てこう発言した。

兄貴分二人はこれ以上ないほど視線が低く、友は髪が腰まで伸びて、長老な仲間に至っては兎の耳が生えている。

【カオス】

ジジはこの状況をそう呼んだ。

「ボクの服貸そうか？」

「そうさね・・・パンダジジの服よりは」

「サイズがあわねえだろ」

残念ながら、ジジよりも二人の外見は下だ。特に最近の生活の変化でジジは身長が急激に伸びてきている。特に神田は「女の子みたいだねえ」「ブツタ切るぞ」「入団してきた頃のがあんだろ」

「アレンは良かったね。髪伸びただけで。可愛いよ」

着替えに向かう二人を見送り、長い後ろ髪を結んでもらっている友人を振り返った。

もともと中性的というか、ジジほどとはいかないがモヤシと称され

るほど小柄で、全体的に白く儚い印象の少年である。アレンは顔をゆがめ、口元を引き攣らせた。

「えー・・・嬉しくない」

「じゃあ美人？」

「ええ・・・」

「もうそれくらいにしてあげたら？」

リボンを結んだミランダが苦笑する。

「はいアレン君出来たわ」

「ありがとうございます、ミランダさん」

「わー可愛い可愛い」

ジジはパタパタ手を叩く。

「ジジ、無表情で言っても信憑性無いです」

ジジはニヤリと薄ら笑いを浮かべた。「可愛いよ？」

「うさんうさいさ・・・」

どこかで見た服を着たラビが開口一番そう言った。

「目元が見えてないから余計さ。そのうっとおしい前髪切った方がいいって」

「あ、ラビ、良かったよ、ぴったりだね。返すのはいつでもいいからさ」

「そうさね、早く戻るといいさ。コンパスが短くて短くて・・・」
ラビは肩を落とす。

「上手く話を逸らしやがったな」

「詐欺師・・・」

ぼそりとアレンが呟いた。

マリヤの日記（前書き）

NGライフってこんな話VV

時は現代。

火山の噴火で灰に埋もれた町、イタリアポンペイ。そこで暮らしていた剣闘士・シリクスが前世である主人公・冴木 敬大の、前世現世入り混じったハイテンションラブコメ。

・冴木敬大・原作主人公。それなりのイケメンで運動も出来るのだが、中身が大変残念な高校二年生。母は前世の妹、父は前世の恋敵だった。

・芹沢 美衣・前世では元奴隷の剣闘士でシリクスの親友ロレイウス（男）。両親が漫画家。さばさばした明るい元氣系美少女。

・佑城 裕真・美少女風のツンデレ美少年。顔に似合わず男前。前世はシリクスの愛妻セレナ（美少女）。敬大の奇行の原因。趣味は筋トレ。中三。

マリヤの日記

1 .

舞い上がる灰

鉛色の空

降り注ぐつぶて

彼らの背中

笑顔なんて程遠く

幸せになるはずだったのに

ああ最後までも

『私』は見ているだけだった
否、見ることもできなかった
間に合わなかった
ずっと一緒だったのに

最後までくらい

最後までさえも

降り注ぐつぶて

彼らの背中はまだ見えない
湧き上がる熱

最後

『私』を呼ぶ声

「マリヤ！」

「え？」

四角い空は青く、雲なんて一つも無い快晴、気温は朝の天気予報が確かなら、10 ちよつとで降水確率0パーセント。石は降らないし視界はとてもクリア、気温は少し寒いほど。西暦79年8月24日はとうに過ぎ、気付けば西暦2005年、正月休みが終わってすぐの、日本にある普通の学校の校舎の2階の教室で。

「何だっけ？」

「ああもう、流石ロレイウスの妹だよ！」

目の前の、天を仰ぐ彼も。

笑っている彼女も。

『私』だった僕も。

今は現代の日本人学生である。

「え？セレナに会った？」

「そうだよ聞いてくれよ、それがさあ、もうおつとこまえでさあ、俺もう・・・くっ」

「でね、昨日はその子と敬ちゃんと私で遊園地行って来たんだよっ」

うつすら涙を浮かべる敬ちゃん。男の涙は個人的にとっても見苦しい

と思うのだが、彼のそれはなまじ顔が良いからか、今やコントのよ
うな雰囲気で楽しませてもらっている。対して美衣ちゃんは対称的
だ。つまりすごく笑顔。これも何時もどおりである。

「ええ、それはずるいよ、何で僕も呼んでくれなかったの？」

「いや、ご、ごめん。もう自分のことでイッパイいっぱい」

「敬ちゃん忘れてたって言うの？僕も見なかったのに、セレナ。美
衣ちゃんも？」

「美晴ごめんね？また今度一緒に行こうよ。男の子だし、友達にな
れるかもよ」

どうも現世では、絶世の美少女・セレナは男の子らしい。

「・・・美衣ちゃんが言うなら。今度は誘ってよね」

前世名・マリヤはロレイウスの妹で、現世では満村美晴、敬ちゃん
ことシリクス・冴木敬大と、ロレイウス・芹沢美衣の通う高校に隣
接した中学校に通う、中二の男子中学生だ。鮮やかに甦る記憶は1
900年以上も前の、『マリヤ』という女の子のものだと自覚した
のはいつだったか。とても覚えているような年ではなかったが、そ
の時だけはハッキリと記憶している。僕は『私』で『マリヤ』、今
は美晴だ。

本心としては、覚えて居なくなかった。僕は子供ながらに『死』を
知っているわけで、それは『生』を知っているにも等しいと僕は考
えている。どう考えてもおかしい。だってそれをこれから知ってい
くはずなのに。それでも記憶を持って再び生れ落ちたのは、ひとえ
に前世の兄、ロレイウスの存在だろう。『私』は彼の死に目に会え
なかったし、色んなことが分かっていた。傍観者だったための辛さ
というところ。『行動しなかった行動』で『私』は最後、とても
悔いたのだ。やり直しが利かないなら、僕が兄と『今』を、と思っ
たのだ。

しかしそこで誤算が生じた。

兄は何を考えたのか、女の子として生まれてきてしまった。僕としては、『男の友情』というのを育もうと思っていたのに。それこそ、シリクスとロレイウスのように。

しかも二つも年上の女の子である。当の親友・シリクスは同い年の男子・冴木敬大。僕が会った時にはすでに現世でも親友になっていた。こちらは二つ年下で異性だ。美衣ちゃんがいくら気さくで男前でも、兄さんほどの友情を育むのは無理だろう。

ということでは僕は急遽路線変更。

現在僕、満村美晴と芹沢美衣は、血はつながっていないながらも順調に、『姉弟の家族愛』を育んでいる。

マリヤの日記2

2.

ああもう、これは予想外だった。

「み、美晴ってさ、・・・・・・・・えっと・・・・・・・・せ、芹沢さんのこと」

ついこの間知り会った元・セレナ嬢、今・佑城裕真は、よりもよって我が姉・芹沢美衣（元・男）を好きになった、らしい。（ちょっと違う）

ぶつちやけて言えば、僕はセレナ大好きっこだ。どれくらいか、といえば、敬ちゃんをとにかく言えないくらいと答えておこう。それくらい好きだ。愛してるといってもいい。前世ではいい姉貴分だったし、現在の男としての好みのタイプは彼女のような系統の顔が好きだ。性格はもうちよつとキツめがいいが。

だから実際会って、最初に敬ちゃんのように感極まって抱きつかなかった自分を褒めてやりたいほどなのだ。うん可愛い。ホント可愛い。特にこういう場面、結構オイシイかもしれない。体はばっちり男だけど、恥じらいながら頬を赤らめて聞いて来る美少女、しかもその美少女はセレナ。わぁーかわいーいVとまあ、こんな感じだ。難を言えば、そのセレナが僕よりも少しばかり背が高いことだろうか。敬ちゃんくらいあったら上目遣いがさぞいい感じだっただろう。現状ではむしろ僕のほうが僅かに見上げる形となり、微妙な感じだ。

「僕は美衣ちゃんの弟だよ」

「えっそうなのか！？そういえば顔そつくりだし・・・」

「いやそうじゃなくて、兄妹の杯を交わしたっていうか」

「そ、そうなのかつ」

喜んでる。嗚呼、本当可愛い。前世は天然ドジキャラみたいなかんじだったけど、今のツンデレもいいかもしれない。前はどちらかといえは綺麗な感じだったし新鮮だ。口角が上がるのも仕方ない。敬ちゃんがホモに走らないかと物凄く心配だったが、これはまあ・・・・ホモに見えないいいんじゃないじゃ、とか思ってしまう危ない自分がいる。

「じゃ、じゃあなっ」

パツと片手を挙げて忙しく彼は駆けて行った。心なしか、逃げるように見えたのは僕だけだろうか、少し裕真には申し訳ないことをした。主に思考内で、だが。

ちよつと補足。

話したのは学校帰りの通学路でのことだったのだが、そこから裕真少年が去り、僕一人で帰る途中、家まであと50メートルといったところでだっただろうか。僕はふと気がついた。彼はもしかしたら僕と同じだったんじゃないだろうか、と。

上記の彼の発言の通り、僕は美衣ちゃんと似ているのだ。美衣ちゃんミニバーションとでもいつておくか。前世では兄妹だったわけで、美衣ちゃんはばっちり青年から女の子の容姿に変わったのに、僕は『マリヤ』の容姿を引き継いでいる。その美衣ちゃんミニバーションの容姿で、彼は僕より背が高いから自然上目遣い↓悩殺。あーなるほどね。

次の日学校に行ったら、「裕真が筋トレしてムツキになるうとしてる」とか敬ちゃんに泣き付かれてしまったのだが、まあ背を伸ばして本物の美衣ちゃんの上目遣いを見たいなーとか思ったのではなからうか。僕に非はないと主張する。

僕がシリクスとロレイウスに再会したのは中学に入学した次の日のことだった。

今年こそは、と思い13年。少し疲れていた。外を歩けば、通り過ぎる人々を見つめて兄の姿を捜し、そのうちそれが、ポンペイの誰かになり、もしかして僕は生まれてくる場所を間違えたのではとすら思っていたころだった。

どうも、隣接した高校では噂になっていたらしい。いや、出所は中学在校生からだろうか。

「新生に芹沢先輩のちっちゃいバージョンのがいる」

芹沢美衣はとても有名だった。僕のクラスメイトに姉が高校で演劇部をしている生徒がおり、その姉経由で、本人に話が行ったらしい。前日から僕を見ようと隣の校舎から来た生徒で一杯だったため、二日目ともなるとげんなりして「僕は芹沢じゃなくて満村です」と友人に伝えてくれるのを頼んだのだ。そこで、「マリヤ」と敬ちゃんに大声で呼ばれ、驚いた矢先に抱きつかれ、美衣ちゃんをその後ろに見つけたのはその後だ。思えば敬ちゃん抱きつき癖があるらしい。突然の本人登場にその場は沸き、しかもその彼氏という噂の人に抱きつかれた僕。カオスだ。大混乱に陥った。騒いでいたのは高校から来た人たちで、ウチのクラスメイトはぼかんとしていたが、後で質問攻めに会った。今ではいい思い出だ。

引きずられるように連れて行かれた裏庭で敬ちゃんは再会を喜んだが、僕は歓喜するよりも混乱していた。兄は女の子になっているし、もう一人の姉貴分アリアと性悪ラウルが結婚してるとか言うし、し

かもシリクスの親だとか、兄は美少女になっているし。（誇張）

考えれば、私が男になっているのだから、その可能性だってあったのだ。後を決めたのは美衣ちゃんの一言。「私にも記憶があればよかったのにね」

もはや反射である。口について出ていたのは、「先輩方は誰ですか」の一言。

どうしてかは分からない。無意識に色々感じたのだろうか。それともただ単に、兄が覚えてないという、それだけの理由だったのだろうか。

それとも、マリヤの女の直感で、恐らくこうなることを予知したのだろうか。

すべては分からない。

生涯分かるときもこないと思う。

マリヤの日記3

4・

敬ちゃんが告られて、間違つてオーケーしちゃったらしい。

情報源は裕真だ。僕も美衣ちゃんオンリーワンだから人のこと言えないが、敬ちゃんはセレナセレナ言い過ぎだと思う。とにかく僕は怒っていた。前世では家庭を築くどころか恋なんて当たり前のこともできなかった兄である。美衣ちゃんには幸せになってほしいのだ。そのためには敬ちゃんが必要だ。他を見るな、目の前を見てみると言いたい。よくよく聞けば、どうやら裕真は美衣ちゃんに振られたらしい。なんとハッキリしないが、遊園地で敬ちゃんが「裕真とお似合いだから付き合えば？」とほざき、美衣ちゃんを泣かし、美衣ちゃんは涙のわけを報われない恋だと裕真に語ったという。現在は美衣ちゃんの幸せを一身に願っているらしい。

僕はこの日、裕真と同盟を組んだ。元・ロレイウスの妹同盟である。二人とも今は男だが。

「裕真君やめよっ敬ちゃんが間違つてオーケーしたのは分かったけど、あの子と付き合うつて決めたんなら尾行しても仕方ないよ」

「別にあんな奴尾行してねーもん。俺は買い物に来たかっただけ」
「そうだよ美衣ちゃん。あんなストコどっこいやローは僕、視界にも入れたくないから。たまたまだよ、たまたま」

「も」

渋る美衣ちゃんにカップを握らせる。中身は某ファーストフード店の新製品である。

「僕のオゴリだから」
ずるいといわれようが、これが僕のやり方だ。

駅前の喫茶店と隣接したブティックにて。視界の端にはばっちり喫茶店で彼女を待つ敬ちゃんが見られる上、棚が多くて向こうから僕は見えない、という好条件の場所だ。

「ちょっと何コレ」

「裕真君可愛いっv」「裕真君可愛いっv」

「可愛くてどーする!!」

危ない。マリヤが顔を出した。

裕真の女装は完璧である。完璧にセレナだ。難を言えば、全体的に少し骨っぽいところだろうか。しかし胸でも詰めたら解決する程度。美衣ちゃんの手腕には惚れ惚れする。流石漫画家の娘だ。

「裕真可愛いよ!自信もって!」

「そんな自信いらねー!」

「ほら美晴も!」

「・・・えっ?」

それはさっきの報復ですか、お姉さま。

結果。敬ちゃんは別れた。

というか最初に向こうに振られた。なんでも容姿と金目当てだったらしい。そりゃそうだ、敬ちゃんはただのヘタレ馬鹿である。

「そりゃそうだよな」

更衣室から出たら総て終わっていたのはアレだが。

「ていうか美晴のそれは何だ」

「女装・マリヤヴァージョン！」

「……このまま帰らなきゃ駄目？」

無言で笑いかけられた。駄目らしい。現世の母よ、僕は女装癖なんてないので、黙って部屋に帰らせてください。

5・

「どうせだから、美晴もマリヤ役しない？」

「うーん……」

演劇部でポンペイの劇をするらしい。でも前回の女装で帰宅してから、母の視線が何か痛いような気がするのだ。このままでは僕の人生設計が狂ってしまう。それだけは阻止したい。僕は現世では『男の子』である。

「今回はやめとこうかな」

「うーん残念」オイ。

思わず突っ込んでしまったが、美衣ちゃんは本当に眉を下げ、名残惜しそうに「しかたないよね」と言っている。恐らく女装のまま帰らせたアレを気にしているのだろう。後日謝罪された。

美衣ちゃんは裕真が来てから少しおかしい。否、セレナが現れてから、というべきか。

美衣ちゃんとはつくに諦めていた。敬ちゃんにはセレナだから、と。しかしセレナは今は『男の子』、しかも、『マリヤ』と『美晴』が

混ざり合っている僕と違い、彼は根っこから『男』である。もし、敬ちゃんがホモに走ろうと裕真はなびかないだろうし、第一敬ちゃんには『セレナ』を泣かせない。これはセレナだけではなく妹分の『マリヤ』もだ。ではロレイウスは、といえば、敬ちゃんの中では『ロレイウス』は『男友達』である。遠慮も何もあつたもんじやない。ここが僕が気に入らないところだ。

美衣ちゃんは女の子である。

そりゃあ、ちよつとした希望はあるのかも、と思うだろう。敬ちゃんは裕真がセレナに見えるのは仕方ないとしても友情を育もうとしているみたいだし。この前の彼女事件では特にそれが謙虚に現れていると思う。

「なあー台本と衣装もらつたから、敬大に突撃セレナ訪問ドッキリ仕掛けようとおもうんだけどさー」

「え！何それおもしろそう！」

裕真が言った思いつきに飛びつく。

「美衣ちゃん舞台は無理だけど、衣装と台本、少しだけ貸してくれない？」

僕は僕の出来ることをしたいと思います。

「……つたく、裕真は言う事聞かないし、芹沢は分かってないし」

芹沢が『ロレイウス』だから、あんな突飛な話を打ち明けたのだ。かつての親友なら、大丈夫だろうと。

不安が無かったわけじゃない。むしろ、『今』の芹沢が受け入れてくれるかどうかは賭けだった。可愛がつていた妹は自分の母親だというし、セレナを取り合つたライバルは父親。可笑しな長い夢かも

しれないと、何度心の隅で思っただろう。それを何度も何度も否定して、信じてきた先にいた親友だ。

そういえば、美晴はどう思っているのか。

かつての妹、と言ってもいい存在だ。ロレイウスの妹マリヤ。

多くある記憶は、笑顔で「行つてらっしゃい」を言う姿だろうか。

印象強かったのは、無心に黙々と包帯を巻く姿だろうか。ロレイウスに似た、笑顔の可愛い女の子だったように思う。確か、あの時マリヤは13歳、今の美晴よりも幼いのだ。

『美晴』は『マリヤ』だと、本当のところ一番よく思う。裕真は外見こそセレナだが、中身はアレだ。芹沢は外見も考え方も、『ああ女の子なんだな』と思う事も、実のところ最近よくある。しかし美晴は、出会った頃から変わらない。『マリヤ』だ。記憶があるんじゃないかと、考えることだって。美晴もマリヤも、ロレイウスや自分の後ろでよく笑っている子だと思う。会話には入らず、後ろで俺たちの話を聞いて、肩を揺らしている。そんな子だ。

「裕真のヤツは全面的に芹沢の味方だしよー」一人愚痴も零れるというものだ。

「お悩みですか？シリクス様」そこにいるのは薄絹を纏ったかつての妻の姿。

俺は吹いた。

「勝手にお邪魔してごめんなさい。どうしてもお会いしたくて」

「セツセツセレナ!？」

「わ、早いよお姉ちゃん！そんなにお兄ちゃんに会いたかったの？」

「マリヤ！？っていうかセレナが俺に会いに！？」

「……お姉ちゃんの事、嫌い！？」

「ご迷惑でも居座りますから」

「こんなに健気なのに……」

「どこが！？図々しくない！？」

「ここにいたら……駄目ですか？」

「いいいいいやダメっつか……」

「セレナの事嫌いになります？」

「そそそそんなわけ……」

「じゃあ好き？」

「もうヤメテー！！！」

天然と妹のタッグはリーサルウエポンだと思う。

マリヤの日記4

6・

「衣装と台本もらったから早速やってみた。本来なら女のカッコとか絶対やだけど役なんだから仕方ねーよな」

「・・・マリヤもやるのか？」

「えっ、お兄ちゃん私にもやってほしいの？ダメだよそこは、『セレナさえ見られれば俺は十分』くらい言わないと！」

「う、ぐああああ」

「お前ノリノリな」

「敬ちゃんいつまで悶えてるの？ぶっ」

ああ何この面白い生物。

「それにしてもこの話、お前が作ったんだろ？セレナってお前をフツた元カノだよな？相当好きなんだな・・・」

「フラレてね——っ！！お前が言うなそんな目で見るなっ」

本当に相当好きなんだろう。実際、いつまでたつてもどこまでも初々しい夫婦だった。指先が触れれば赤くなり、手を握ればテンパツて、「いつ二人の子供が見られるの？」という子供の戯言に固まっで。あのころはどちらかといえば、シリクスも天然だったのだ。イタリア人のくせに、そういうのにはとても疎かったように思う。

「大体俺はダメだつて言っただろ」

「まだ言ってるのかよ」

「・・・敬ちゃ」

「この台本、別に何の問題も無かったぜ？何が・・・」

「あのさ、け」「台本じゃない！」

「ポンペイは劇の台本なんかじゃない・・・」

その大声で、美衣ちゃんが上がってくる音が聞こえた。搾り出すように出た声。それは、僕にとっても、恐らく美衣ちゃんにとっても、痛い言葉だ。

彼と僕は、同じだけど、違うと思った。今の彼は、敬大だと思う。シリクス自身じゃなくて、『シリクスを知っている敬大』。

言いたい。けど、言えるだろうか。今言えば、取り返しはつかない。やり直しはきかない。『マリア』は駄目だと言っている。

美衣ちゃんは、今、部屋の前にいる。

「……わかんねーよ……お前の考えてる事……」

「この話の内容は……俺の大事な……大事なものなんだ。誰にでも話したんじゃない。芹沢にだけ話したのに……あいつにとつては、演劇台本のネタでしかなかった……遊び半分だったんだ」

言えればいい。また同じだ。

「……芹沢さんは、そんな人じゃねーだろ」

「だって現に……」

——でも今は、その時じゃない。

「芹沢……」

「美衣ちゃん」

ドアの前に立つ彼女に声をかけると、黙って人差し指を立てられる。僕は少し下がって黙って後ろの壁に背中を持たれた。かけた。

「ごめん……敬ちゃんが反対してたの、そういうことだったんだね。でも私、敬ちゃんの話ネタとか思って聞いてたんじゃないよ」

『私にも記憶があればよかったのにね』

僕を決めたのは、その一言。

彼女は同じ景色を見たかっただけだ。

7・

「満村」

「うわぁ」

思わず。

思わずである。

セレナが居た。今無きポンペイ衣装を纏ったフル・ヴァージョン・セレナが、廊下の向こうから僕の名前を叫びながらこちらへ駆け寄ってくる。「なんだよ。うわぁって」不機嫌そうに、彼女、もとい彼は言った。

「もうそれ怖いんだけど……うわぁセレナだ。それ胸もまんまだよね。うわぁ……」確認のために、まったいらの胸に手を当てた。

「ちよっ、触んな!!」

セレナ、じゃない裕真の顔が朱に染まる。

「……うわぁ、モノホン」可愛いな！セレナ。

「今から練習なんだよ。行くだろ？」

「んー、今日は美衣ちゃんの顔見てないし、敬ちゃんのヘタレも見えないから行く」

「うわぁシスコン……そしてブラコン？」

「いや、敬ちゃんは違う」

「すっぱり……」

「敬ちゃんがロレイウスと結婚する気があるなら別だけど」

「ハハハッ」

冗談交じりの言葉に裕真は笑った。

「裕真は裕真だねえ……」

セレナではない。

裕真は今度は首をひねった。

君はただの男の子。

——じゃあ私は？

——君はマリヤ、僕は美晴だ。

きつともう、変わらない。変わらない。

8・

突然だが。

熱が出た。

否、それだけでは語弊があるか。敬ちゃんなんかは年中熱に浮かされている。

僕の場合はアレだ。えー……イカン。熱で頭が回らない。

そう、アレだ、インフルさんだ。たぶん。病院へはまだ行っていないのでわからない。

こうやって日記を書いているのも実のところ結構辛い。

ここでアレ？と思った方。そう、これは日記である。

僕、元マリヤ、現満村美晴が、日々話せない前世を交えたあれこれを書き溜めた日記だ。メモリーには小学校のころくらいからのもある。話したくても話せない、そんなストレス解消の場だ。

話は戻って、今現在の体温。

えー……37、否38、2……？ いやばーんと上が

って、39、4、いや5？ あれ？

えー……とにかく高い。

うわコレヤベエ死ぬ。ヤバイ。こんな数値、人為的なの（イタズラ）以外で見たこと無い。いや、僕の体温なわけだから一応人為的？あ、

駄目だ。これもう駄目だ。もう自分でも意味がわからない。明らかにおかしい。まるで敬ちゃんのようなではないか。ぱそんく、じゃないパソコンいじくってないで布団に行かなくては。

と、思ったところで記憶は途切れていた。

いつのまに寝たんだよ、と。そう思いながら目が覚めて、気がつけば吃驚、病院のベットの中だった。本当ビックリ。なんだそれ。とりあえずナースコールをして、しばらくして看護婦さんが入ってきた。「美晴!」……いや大変嬉しい付属品も連れて。

「もー心配したんだからっ!」

勢いあまって美衣ちゃんは、ばーんと僕に体当たりするように抱きついた。普段ならばたたらを踏みながらも支えるのだが、いかんせんベットの上の病人の身。おもいつきり後ろに倒れて頭を枕とベットの間あたりに打ち付けた。「ぐはっ」

ああ本当に人間ってこんな声出るんだ……と、半ば呆然と思う。

「いたい……」

「美晴!! 美晴大丈夫!!?」

こっちは涙目だ。「だいじょうぶ……!」

弟として! 男として!! と見栄を張ってみた。その後、枕に血がついているのを美衣ちゃんに見つかり怒られた。理不尽である。

カードキャプターさくら（前書き）

- ・ 男主人公
- ・ 特殊能力あり
- ・ 幼馴染は山崎と千春ちゃん
- ・ ただのクラスメイト
- ・ 結構普通？

カードキャプターさくら

ダイヤモンド・ケイリスクは特に目立たない生徒だ。

日本の私立の小学校に通う外国人のわりには、日本語が堪能で、むしろ上級生も使わないような言葉を知っている。

外見で言えば、若干まわりよりは色素が薄い茶の髪で、紫色の眼は濃すぎて、光を当てないと黒に見えること必須だし、顔立ちも整ってはいるが彫が少し深い程度で、いつも付けている真っ赤な下半分だけのフレームの、ゴツイ眼鏡の方がよほど目立つ。

性格も明るく、特に親しい友達、親友といえば幼馴染の山崎貴史だが、（同じく幼馴染の三原千春とは女子と言う事で疎遠になってしまった）人見知りを特にするでもなく、山崎以外なら広く浅く、それなりに『友達』は多い。成績も、この年頃、あまり他とは大差ない。90・80点あたりをウロウロしている。運動オンチで体育だけは苦手だが。

ただ、当てられでもない限り、手は上げないし、クラスでドツチボールをすれば、早々に当たるか、端の方で突っ立っているかで、与えられた当番の仕事はこなすが、忙しく働いていたと思ったら、目立たないところでサボっていたりトイレへ行くふりをして休んでいた。

私立ということで、それなりに外国人の生徒も学年に一人二人いる。『クラスの優等生』というよりは、目立たない『しっかりした生徒』の一人だった。

夏も近い、6月末のプール開きの日だった。その日、ダイヤモンドは行きが一人だった。

いつもは山崎と帰っているのだが、彼は四年生にして千春と『お付

き合い』しているため、ときたま二人で帰りたいこともあるだろうと、10歳の男子は利かせない気を利かせて、ダイモンは一人で下校したり登校したりすることが週に1、2回ある。これがたまたまその日で、遅刻気味かもと、若干早歩きで、通学路を歩いていた。

「あつ」

人の少ない住宅街は声がよく響く。パツと口を覆うと、視線だけ上へ向け、眉を寄せた。

——点々と、紅い雫が垂れている。

雫は途中で空の青に溶けて消えていく。

それは眼鏡の間からみえるもので。

少しだけ眼鏡をずらす。雫の上に鳥がいた。要するに怪我をした大きな鳥が電信柱に止っている。大きいといってもカラスより一回り大きいほどの、見たことは無いが恐らく鷹ぐらいの。

ギュツと眼を瞑って、再び開けると、鳥はいなくなっていた。紅い雫も無い。蒼い空と電信柱と電線が走っているだけ。

子供らしからぬ、諦めの細い溜息について、ダイモンは通学路へと足を進めた。

「おとといね、六年のプール開きだったでしょ。そのとき千夏ちゃんに誰かに足を引っ張られたんだって」

「え、マジで。悪戯？千夏お姉ちゃん美人だから？」

「違うよ。昨日の三年も手とか足とか引っ張られてるんだって。これ千春ちゃん情報」

「えー余計プールしたくなかった」

ずれた眼鏡を直しながらパンを口に運ぶ。そのしかめっ面に、山崎はいつもと同じ笑顔で指摘した。「そんな不味そうに食べないでよ」

「それにダイモン君が体育嫌がるのはいつものことでしょ？」

「体動かすのは好きだよ？でも水は駄目。絶対浮かないもん」

「人間の体は浮くようにできてるんだよ」

「絶対嘘」

「これはほんとなのに」

いまいち信憑性に欠ける笑顔を見て、ダイモンは溜息を吐きながら最後の一口を齧る。雨の降りそうに無い晴天を見上げ、小さく呪詛を呟いた。

「・・・水泳が健康に悪いって、世界的に認められないかなー」

「無理だよ」

「貴史は腹黒いよねー・・・」

「ダイモン君は可愛いよねえ」

「無謀なところが？」

「あはは」

カードキャプターさくら（後書き）

ダイヤモンドⅡケイリスク

血液型／O型

好きな科目／

国語と算数と理科と社会と図工と音楽（要するに体育以外）一番は
国語と音楽と図工と自習

嫌いな科目／

体育

所属クラブ／

美術部

好きな色／

黒・ジャパネスクカラーな金や赤・群青色・白

好きな花／

紫陽花・秋桜

好きな食べ物／

蒸しパン・和食の煮物・肉

嫌いな食べ物／

おから・大豆（節分用とかの）・糸こんにゃく・えのき

得意な料理／

卵ご飯・ふりかけ・犬の餌（近所の野良行き）

今ほしいモノ／

落ちてこない眼鏡・新しい、収納に優れた鞆・快適な長期休暇（夏は暑いし冬は寒い）

備考／

- ・国籍は欧米のどっか。
- ・でも、英語より日本語の方が好き。バイリンガルな子。
- ・両親不在。今お世話になってるのはおばさま（年齢不詳）。たぶん身内。身の回りの世話はヘルパーさんがやってくれてます。
- ・山崎・千春とは幼馴染。でも2年ほど離れていた。
- ・ので、その間になんとなく千春ちゃんとは疎遠に。ちょっとウザイけど大切な、女兄弟みたいな感じ。
- ・山崎は唯一の親友にして悪友。

拝啓、夢中のお姉さま・inハリポタ（前書き）

- ・学園モノばかりに飛ばされる主人公。
- ・夢の中では復活世界在住・姉、奏さんに会える
- ・シスコン？
- ・この時点で学園アリスは経験済み
- ・勘だけはいい

拝啓、夢中のお姉さま・inハリポタ

「君は変だよ」

この言葉を覚えられないほど言われたなら、真の変人に与えられる称号的なものが、自信の顔には付いているのではないだろうか。

ふっと浮かんだ考えに、周りには聞こえないほど小さく息を吐き、ぼんやり天井を、頬杖について見つめた。

思えば何処の世界に行っても、この動作だけは変わらないように思う。肘の下に本があつたり、ノートがあつたり、今回は宿題の羊皮紙が。そんな些細な違いはあるが、だいたいは変わらない。

ただ、居る場所が違うだけで。

「あつこんな所に!!」

眼鏡の男の子がひよこつ、と顔をのぞかせた。

拝啓、夢の中のお姉さま、さすがのぼくでも、この世界は知っているかもしれないです。

呟き、また少し思案する。

「こんな隙間にテーブルと椅子が・・・ああそれよりも!ハヤテ、早く早く君が来ないと駄目なんだ!!」

「はいはい」

「いつものぼんやりも今日の今だけは止めて!!」

「・・・はいはい」

忙しい。まるで母親を急かす子供のようだ。

ああでも母親役はちょっとアレだから父親? いやいやこんな大きな子供はまだ要らないしなあ。ねえお姉ちゃん、ぼくどうしたらいい

かな？知ってる世界に来るのは初めてだ。お姉ちゃんは知ってる世界だと、色々大変だと言ってたけど、たしかにそうかもしれないね。話題の名作！なんてあるから、つい読んじゃったんだけど。普段と違う事はするもんじゃないね、いつもみたいな専門書を買えばよかったよ。しかもぼく、アレ四巻の上を読んだだけなんだよね中途半端にも程があるっていうか――

「ハヤテ!!」

「ぼく今日は部屋でゆっくり寝たいんだけど・・・なんか疲れた。お姉さまに会いたい」

「いつも寝てるじゃん！今はこっちが大切なんだよ！勝負の要なんだ!!君の勘が必要なんだ!!」

「ただのゲームでしょ――？」

「僕の財布の中身がかかったね!？」

「いいじゃない、バタービールの一本や二本」

「×五だよ！10本は無理!」

「君が買ったら?」

「誕生日にチエス盤!!」

「あゝ・・・割に合わない」

「奢るから!どんなマイナーな専門書買っても文句言わない!『夢見る殺人鬼』でも『園芸大会の開催方法』でも『煎餅少年』でも『桜の下のしゃれこうべ』でも!!」

「おーけーおーけー。全力は尽くそう。うん」

拝啓夢の中のお姉さま、顔も知らない両親はお元気でしょうか。ぼくは10代後半に差し掛かりました。

意外と無鉄砲な子供達との針でぼたな魔法学校生活は、得する事が多いです。

欲しい専門書は日本円にして税込み52040円也。

バジリスクの憂鬱（前書き）

主人公は女の子。

そして変人。

認識としては「あれ私って、メスでしたっけ」

自覚はある。だからこそ性質が悪い。

好きなものは、廃墟と実験。

師匠はシャマル。

尊敬してますよ？ええしています！

あいらぶ十代目。

やたらと日本人くさい。

でも日本嫌い。

そんな彼女は自称医者・他称天才毒師。

毒を盛るのがもはや癖になっている。

お相手は変態。パイナポー（と書いて骸様）

一応ある本編はこんなに甘くない。

バジリスクの憂鬱

「シャルロット」

なぜこの男は無駄に声がいいのだろうか。流石の私も耳元で呼ばれたら心臓が跳ねる。私は掬い上げるように視線を上に向け、鳶色の長い前髪の間からそのオッドアイを見つめた。「……シャルロット」ああ、そんなうれしそうな顔をしないで。

「……なんで、知っているんですか」
「何を？」

「その名前、嫌いなんですよね私」
「可愛らしいじゃないですか」
「……いつもどおりでいいです」

シャルロット、なんて柄じゃない。

「……グリム？」

「……」ああそうだ。こいつが無駄にいいのは、顔と性格もだ。眉を寄せると、あらかさまな溜息をついた。

「貴方はことごとく自分の呼び名が嫌いなんですネ。バジリスク」
「そうですね、でも本名よりは好きです」

私の普段の二つ名への否定を知っているからだろう。彼は絶句した。
「……そんなに？」

「バジリスクやらポイズンやら呼ばれるのは嫌悪が湧き上がりますけど、本名には嫌悪と全身の痒みが」

言いながら、隙について彼の中から抜き出し、白衣のしわを伸ばす。あんな体勢でいたからだ、アイロンをドクターシャルマルに借りなけ

れば。

「・・・彼は持っているだろうか。」

「次にその名前で呼んだら、私うつかり致死量をコーヒーに入れてしまつかもしれないです」

「・・・もう十分僕には耐性がついているのでは？」

「はっその程度」どうにでもなる。

「私は毒師シャルル・グリム・ペティグリュ、バジリスクですよ？」

「よっぽどですか」

呆れた声を出しながらも、性懲りもなくフェイントをかけてくる彼を押しつけて平手ではたいた。「冗談も大概にしてくださいね」

「冗談じゃないんですけど 帰るんですか」「帰りますよ」

「帰らせないと言ったら？」

「盛ります」変な意味ではない。

「数時間後、貴方は本当の意味で骸となっているでしょうね」

「それはまあこの体の持主が可哀そうなことに・・・」

「・・・」「・・・」

「・・・それならなおさら、人様の体でしないでくださいよ」

「・・・それもそうですねー」

私たちは似たものどうしかもしれない。

バジリスクの憂鬱（後書き）

一応ある本編はこんなに甘くない。（大事なので二回言いました）
本編はツナを愛でて、愛でて、盛って——そんな話です。
まあようするに、俺が打ち込むのが面倒なんですよね、ええ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0244h/>

夢小説総合・黒猫（略）

2010年10月9日14時17分発行